東方狂気録

XIA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方狂気録

【Ｎコード】
Ｎ２２４７Ｑ

【作者名】
ＸＩＡ

【あらすじ】
満月の夜。
異質の空気に飲み込まれた少年の史実。

この小説は東方ｐｒｏｊｅｃｔの二次創作になります。
東方の作品が苦手、二次創作が苦手な方は閲覧しないことをお勧めします。

プロローグ

月は満月。
明るい夜空には似つかわしくない空気が
辺りには充満していた。
狂気に満た目をする獣や妖怪達。
幻想郷にまた異変の魔の手が迫っていた。

「う～ん・・・お昼寝してたから夜は眠れないな。」
大きな門の目の前に凛とした態度とは程遠い姿勢で立っている
中華風な少女が呟く。
目の前に広がる湖とそれを渡る橋を見ながら太極拳と思われる動きを
延々と繰り返していた。
だが次の瞬間、少女は橋に向けて拳を構えて、目を凝らして視線を
定めた。
「・・・・」
先ほどからの静寂の空気が今は異質なものに変わっていた。
「・・・来る！」
少女が前に向かって拳を突き出した。
空を切るはずの拳に何かしらの質感を感じた。
カチャンと金属音をだして地面に何かが落ち、
そしてそれが飛んできた先に人影が現れた。
「何奴！」
少女は人物に対して威嚇な言葉を投げつける。
「・・・・・」
しかし返事は無い。
目の前からは異質とも呼べる空気が漂う。
そして次の瞬間には少女と人影の位置が変わる。
「・・・・ぐぅっ！」

「勝負ありましたね」
少女は倒れていく人影をに近づきながら言った。
そして意識の無くなったその”少年”を見る。
先ほどまでの異質な空気が消えていた。
「こんな夜中に何を騒いでるかと思えば・・・」
静寂を取り戻そうとした空気がまた変わる。
「あなたが珍しく仕事してるとは思わなかったわ。美鈴」
ピンクの服に身を包み、背中には翼を持った吸血鬼が言う。
「お嬢様・・・。私だってやるときはやりますよ。」
呆れ顔の少女。紅（ホン）　美鈴（メイリン）は自分の主人に対して
そう返す。
「それで美鈴。その隣に落ちてるモノは？」
吸血鬼の隣にいるメイドが”少年”を指差す。
「先ほどまではかなり異質な空気が感じられたのですが・・・
　気のせいではないと思います。」
美鈴は普段では絶対に見せないであろう真剣な態度で状況を説明した。
「ふむ。その少年を紅魔館で保護しなさい。咲夜。」
「かしこまりました。お嬢様。」
吸血鬼の命令に隣にいたメイドは何人かのメイドを即座に集め、
門の奥にある屋敷に運んでいった。
「いいんですか・・・？」
美鈴は吸血鬼に聞く。
「私の命令よ。」
吸血鬼はすぐに答え、美鈴に背を向け言った。
「美鈴、今日からしばらく忙しくなりそうよ？」
と言い、屋敷に戻っていった。

プロローグ（後書き）

プロローグです。
はじめまして、ＸＩＡ（しあ）といいます。

初めての作品ということでちょっと緊張しつつ書いていますが
初心者なので文章の構成やストーリー構成などがいまいちだと
おもいますが、それも今後改善できたらなと思います。

作品の方ですが今回は軽めに書きました。
次回からはもっといろいろと書こうと思います。

第一話　紅霧　終夜

無。
限りない無。
何も見えないし聞こえない。
自分の存在すらも無いのではないかと
感じてしまうほどの虚無。
いつからここにいるのかもわからない。
永遠にも似た時間かもしれない。
それとも来たばかりか・・・
それすらもわからない。
思った刹那、目の前に針の穴ほどの小さい光。
救いを求めたのか、それとも好奇心なのか、
どちらかはわからない。
だからあるかもわからない足でその光へと進んでいく。
徐々に膨らむ光。
そして光の中へと身を預けた・・・。

「うぅ・・・」
「おや、気付きましたか？」
「・・・眩しい」
ここはどこなんだろう。
心なしか体が痛い。
すごく気だるいし。
少し立つと目も慣れてきたようで
体を少し起こし周りを見る。
自分が寝てるベッドのほかには棚や鏡しかない
質素な部屋。

入り口には2人のメイド。
そして隣には銀色の髪をしたメイド。
「調子はどうですか？
3日ほど目を覚ましませんでしたけど」
そのメイドが俺に話しかけた。
3日・・・。
そんなに寝てたのか？俺は。
「えと、とりあえず説明をくれると
ありがたいです。」
わからないことが多すぎて頭が混乱していた。
「それはまた後で説明しますので
今の調子を教えていただけると。」
隣のメイドは笑顔で言ってきた。
本能で少し危険だと感じたので答えることにしよう。
「少し気だるいですね。
それと身体のあちこちが痛いです。」
「なるほど、わかりました。
それでは説明いたしますので
少々お待ちください。」
メイドはそう言うと部屋から出て行く。
俺は、どうすることもできずとりあえず
もう一度横になる。
少し目を閉じて、混乱している頭の思考を止める。
そして意識が闇に飲まれていく。

「起きろ、怪我人。」
言葉とともに腹部辺りに衝撃を感じた。
痛みが意識を取り戻すのを手伝い、目を開けた。
目の前には先ほどのメイド。
そして中華風な衣装に身をまとった少女。

そしてピンクの衣装に身をまとった翼の生えた少女。
皆が物珍しそうな目で俺を見ていた。
「えと、俺はなにかやらかしたのでしょうか？」
気まずくなって思わず言葉を放つ。
その言葉に、興味を示さずに翼の生えた少女は言った。
「あなた、名前は？」
名前。
個々の存在を認めるためのもの。
俺の頭の中にある情報を全て探す。
そして・・・。
「ない・・・。」
結論を述べた。
「ふざけてるのなら殺しますね？」
メイドが今まで見たことの無い笑顔でこちらに言ってきた。
背筋が凍るとはこの事なのか、額からも冷や汗が垂れる。
「本当にない、というか俺に名前なんてあったのか・・・」
思わず問いの言葉にしてしまったが、回答なんて帰ってくるわけはないだろう。
「そう。私はレミリア・スカーレット。
今日からあなたの主人になるものよ」
レミリアと名乗った少女は目を閉じながら言った。
今の言葉に驚いたのか、中華風な少女はレミリアを見る。
「美鈴。あなたには説明してないわ。」
それを見透かしたかのようにレミリアが答える。
「それで、あなたにはこの屋敷。
【紅魔館】の執事をしてもらう。
詳しい話はこの咲夜から聞きなさい。」
なんだか俺の知らないうちに話がかなり進んでいる。
しかも俺には拒否権は無いらしい。
「それじゃあ咲夜。

”終夜”の面倒は任せたわ。」
レミリアは言いたいことを全て言ったのか、
部屋から出て行く。
そして気になる点が一つ。
「あの、咲夜・・・さん。
”終夜”ってなんですか？」
「それはあなたの名前。
”紅霧　終夜”それがあなたの名前よ」
咲夜はメイドの一人に何かを持ってこさせていた。
それを終夜のベッドの横にある机に置き、
「あなたには今日からいろいろとやってもらうことが
たくさんあります。」
そこで咲夜は美鈴を見た。
「私は紅　美鈴。美鈴と呼んでくれても大丈夫です。
今日からあなたにこの幻想郷で生きるための術を
いろいろと教えていきますのでよろしくお願いします」
ぺこりとお辞儀をされたので俺もそれに返すべく頭を下げる。
「今日は目覚めたばかりだし、頭が混乱してるだろうから
そのまま休んでいなさい。」
咲夜はそういい残すと部屋から出て行き、そのあとに美鈴も
続いて出て行き部屋には静けさが戻っていた。
「あかぎり・・・しゅうやか・・・」
自分に与えられた名前を呟く。
何か心の中ではじけた感じがした。

第一話　紅霧　終夜（後書き）

はい、というわけで第一話です。
ＸＩＡ（しあ）です。

文章がぐちゃぐちゃですね。
それも含めてこれから精進して行きたいですね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2247q/

東方狂気録

2011年1月18日21時31分発行